

氏 名	矢 島 洋 一
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 212 号
学位授与の日付	平成 14 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 歴 史 文 化 学 専 攻
学位論文題目	初期 Kubrawiyya の研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 間 野 英 二 助 教 授 久 保 一 之 教 授 杉 山 正 明

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、イスラーム神秘主義（スーフィズム）のタリーカ（流派、教団）の一つであるクブラウィーヤの諸相を明らかにすることを目的とする。

時代は始祖ナジュムッディーン・クブラーの時代からアラーウッダウラ・スィムナーニーまで、すなわち13世紀初頭から14世紀初頭までの時代を扱い、便宜上、この時代のクブラウィーヤを初期クブラウィーヤと称する。

地域としては初期クブラウィーヤのスーフィーたちの主たる活動地域である中央アジアとイランを中心に扱う。

第1章「タリーカ」では、スーフィズム史上におけるタリーカの位置付けとその定義を行う。タリーカとはスーフィズムの方法論の分化と共に発生した流派やそれを奉ずる教団組織を指し、スーフィズム史上においては神秘主義哲学や聖者崇拜などと共にスーフィズムの多様化の一端を担うものであった。そのようなタリーカは、一般にその教団組織としての側面のみが強調されて「スーフィー教団」と訳されるが、それはタリーカの一面に過ぎない。

筆者は、タリーカの存在形態は(1)スィルスィラ（系譜）・師弟関係(2)教義・修行法(3)教団組織(4)帰属意識(5)他者の認識、の五つの面から検討されるべきであると主張する。タリーカは、これらの複数の基準から見ると、同一のタリーカであってもその指示範囲にはしばしばずれが生ずる。

従来のタリーカ研究はこのようなタリーカの多様な側面を十分に認識しないまま行われてきたため、スーフィーのタリーカへの帰属やタリーカの成立について十分な理解がなされてこなかった。タリーカ研究は、個々のタリーカの存在を自明視することなく、そのタリーカが何を意味するのか理解した上で行われなければならない。

第2章「Kubrawiyya の諸相」では、前章で述べたような認識に立ち、いくつかの面から初期クブラウィーヤの諸相を検討する。

まずクブラウィーヤのスィルスィラは、始祖ナジュムッディーン・クブラーの時代に既に成立していた。以後は文献上で確認できる限りでは主に三人の弟子を通じて系譜を伸ばしたが、多くのスィルスィラの例に漏れず、その系譜には他のタリーカの系統も混入し、逆にクブラウィーヤの系統も他のタリーカの系譜に混入した。従って、クブラウィーヤへの帰属はスィルスィラへの接続のみでは決定し得ず、スーフィーたちがクブラーに連なるスィルスィラを最も重視していたかどうかの問題となる。

一方クブラウィーヤの教義は、修行の途中に体感するヴィジョン（ワーキア）を重視することに特徴がある。それはヴィジョン体感に至るまでのプロセスとヴィジョン体感後の解釈の二段階に分かれる。前者は「八つ（あるいは十）の規定」という作法の定まった独居（ハルワ）によって、後者は導師の解釈によってなされる。

ヴィジョンの内容は様々であったが、クブラウィーヤのスーフィーたちはそれを記録することには消極的であったと思われる。また彼らはしばしばその解釈を書簡を通じて行い、それによって師弟が別居した状態で教導を行うことが可能であった。

教団としてのクブラウィーヤは、統一的な組織ではなく、個々のスーフィーが各地で形成した個々の教団として捉えられるべきである。ただし、上述のような書簡の交換を通じて個々の教団と教団の間に若干の関係はあり得た。

また、文献上で確認しうる限りでは各教団はほとんど一代限りのもので、世襲により教団を維持したバーハルズイーを例外として、継続的な教団はほとんどなかった。

帰属意識・他者の認識については、同時代には自他共に、「クブラウィーヤ」などクブラーの名に因む名称は用いていない。従ってその帰属意識は「クブラウィー教団乃至クブラウィーヤ」への帰属ではなく、クブラーの系譜に連なりその教義を受け継ぐ者であるという自覚であったと思われる。後世には分派学的な観点からクブラーの後継者たちは一集団として認識されたが、それは必ずしも実態を反映していない。

結論として、クブラウィーヤの名称・概念は、ナジュムッディーン・クブラーに連なる系譜を持ち、その教義を受け継ぐスーフィーたち、また彼らが形成した個々の教団を指す他称として一応の有効性を持つが、その存在形態は極めて漠然としたもので、その周縁は曖昧であるといえる。

第3章「Kubrawaiyyaに関する三つの通説」では前章で述べた認識に立ち、従来クブラウィーヤの存在形態を検討しながら語られてきた、クブラウィーヤに関するいくつかの通説の修正・再検討を試みる。

まず、従来クブラウィーヤのスーフィーとされてきたサアドゥッディーン・ハンムーヤの帰属について再検討する。ハンムーヤがクブラーの弟子であったのは事実であり、またイスラーム世界においても一般にハンムーヤはクブラーの弟子として認識されてきた。しかしその師はクブラーのみではなく、また文字の秘教的意味を重視するその思想は同時代のクブラウィーヤのスーフィーたちとは大きく異なる。従ってハンムーヤはクブラウィーヤのスーフィーとは見なしがたい面がある。しかし当時のクブラウィーヤ自体が、それへの帰属の有無を明確に規定できる存在ではなかったために、ハンムーヤはあくまでグレーゾーンにいる人物と見なすべきである。

次いでクブラウィーヤがモンゴルのイスラーム改宗に関与したという通説について、ベルケの改宗とサイフッディーン・バーハルズイーとの関係、およびガザンの改宗とサドルッディーン・ハンムーヤとの関係に注目して検討する。

前章で述べたように、各地で活動するクブラウィーヤのスーフィーたちに統一的な組織は存在しなかった。それ故、モンゴルの改宗に関与したスーフィーたちの活動をクブラウィーヤというタリーカの活動とは見なしがたい。加えて、ベルケについてはバーハルズイーによる改宗の事実自体が曖昧であり、ガザンについてはサドルッディーン自身がクブラウィーヤに帰属すること自体が根拠薄弱である。

従って、モンゴル君主の改宗とクブラウィーヤとの関係についての通説は、それぞれ二重の意味で誤りを犯していると言えるので、廃されるべきである。

次いでクブラウィーヤとシア派を結び付ける通説について、その根拠となったモレの論文の批判と、預言者一族崇敬とシア派との関係を示すスィムナーニーの書簡を訳出・分析することで再検討する。

教義面におけるクブラウィーヤは神秘主義思想を共有するスーフィーたちの総称であって、預言者一族崇拝やシア派思想をクブラウィーヤというタリーカと結び付けて論ずることに意味はない。また、預言者一族崇敬はスンナ派でも行われているから、それをシア派と同一視することは誤りである。しかし、そうであるからと言って、両者を無関係であると断じることができない。スィムナーニーの書簡が示唆するように、ムスリムたち自身の中に両者を無関係とする見解と両者を結び付ける見解が混在していたので、両者の関係の有無を論じるのではなく、その関係の様態を理解すべきである。

第4章「'Alā' al-dawla Simnānīとその活動」では、初期クブラウィーヤの中で最も関連史料が豊富なスィムナーニーの活動の諸相を明らかにする。スィムナーニーはイラン地方都市の名家に生まれ、若年時には異教徒であるモンゴル人君主アルグンに仕えたが、やがてスーフィズムに傾倒してクブラウィーヤのスーフィーとなり、故郷にハーンカーを建設して生涯そこで活動した。

スィムナーニーは過度の聖者崇拝に対しては批判的であったが、典型的な聖者崇拝の場である聖墓参詣は、修行の一環としてその有効性を認めていた。また同時代のサフィーユッディーンの教団など拡大傾向を持つ他教団に対して批判的であり、限られた弟子たちと共に修行に専念することを目指していた。

スィムナーニーは当時のモンゴル人支配者たち、具体的にはオルジェイトゥ、アブー・サイード、アミール・チョパンら

からは宗教的権威として一定の尊敬を受けていたが、彼自身は彼ら支配層との関係には消極的であった。

経済的には、都市名家の出身である自らの立場を利用し、私財を投じて修行者のために修行場を建設し、イスラームの定める寄進財産（ワクフ）としていた。またその財産管理の役職の世襲を禁じた。

スィムナーニーの活動は、クブラウィーヤへの帰属と同時に、活動の地域がモンゴル人の支配下にあったという時代性、都市名家の出身であるというスィムナーニーの個人的な事情と背景を、十分に考慮に入れることではじめてよく理解される。

結部においては、クブラウィーヤ理解の意味について簡略に述べる。

クブラウィーヤの存在形態やスーフィーのクブラウィーヤへの帰属は、従来考えられていたよりも、はるかに漠然としたものであった。スーフィーたちにとって、クブラウィーヤへの帰属は自らの活動に一定の影響を与えてはいたが、それと同時に彼らの個人的な志向と環境によって規定される部分も大きかった。

クブラウィーヤの歴史は、一つの集団の活動としてではなく、それら個々のスーフィーの活動の総体として捉えられるべきである。

附録として、従来十分に整理されていなかったナジウムッディーン・クブラーの著作に関する書誌情報をまとめた。

論文審査の結果の要旨

12・13世紀以降、イスラーム世界では普通イスラーム神秘主義教団、あるいはスーフィー教団とよばれる多数の教団の活動が活発となり、これらの教団の活動は近代に至るまで、イスラーム社会の動向に様々な影響を及ぼしてきた。

本論文で論者が取り上げたクブラウィーヤ（Kubrawiyya）も、学界の通説では、そのような教団の一つと考えられており、そのため通常この Kubrawiyya を「クブラウィー教団」と呼んでいる。しかし比較的研究が進んでいる他の諸教団、例えば Naqshbandiyya（ナクシュバンディー教団）や Mawlawiyya（マウラウィー教団）などに比べて、クブラウィーヤの研究は従来十分に行われてきたとは言えず、クブラウィーヤをはたして一つの「教団」と見なしてよいかすら、実はなお不確実な研究状況にあると言わねばならない。

このような状況のもとに、論者は本論文で多数のアラビア語、ペルシア語の一次史料を駆使して、このクブラウィーヤの従来明確ではなかった諸特徴を明らかにして、クブラウィーヤ研究、さらにはイスラーム神秘主義教団研究を大きく前進させることに成功している。

論者が本論文で明らかにしたクブラウィーヤについての独創的な論点を列挙すれば以下のごとくである。

1) クブラウィーヤと呼ばれるスーフィー（イスラーム神秘主義者）達は、「教団」と呼ばれるような組織は所有していない。クブラウィーヤという名称も、単に中央アジア生まれのスーフィー、ナジウムッディーン・クブラー（1221年没）の教えを継承して、その教えに基づく修行を各地で実践していたスーフィー達を指す総称にしか過ぎない。クブラウィーヤと呼ばれる人々の活動の初期、このクブラウィーヤという名称は自称としても他称としても現われない。それ故、この名称は後代に至ってはじめて用いられた他称と見るべきである。

2) クブラーによって確立された教義、修行法は、弟子、また孫弟子へと受け継がれていったが、それはあくまでも教義、修行法の継承であり、教団組織の継承ではなかった。また教えを継いだ者どうしが連絡を保ち、教団としての統一的な行動をとったこともない。それ故、クブラーの死去と共に、クブラーとその弟子達を構成員とする組織、すなわち教団的な組織は消滅したと解するのが妥当である。

これら二つの論点は、クブラウィーヤを「クブラウィー教団」と呼んで少しも疑わなかった通説に対する説得力のある批判として高く評価できる。

3) クブラウィーヤと呼ばれるスーフィー達の修行法は、沈黙、断食などを含む「八つの規定」に要約されるが、その修行法の中心をなすものは、ハルワ、すなわち独居（普通、四十日間）である。独居は俗世との隔絶を必要とするものであったため、この修行の重視がクブラウィーヤのその後の衰退と無関係であったとは思われない。

4) 彼らが重視したのは、修行中に体感できる、ワーキア（出来事、体験）、すなわち内面にヴィジョンをみるという体験である。クブラウィーヤでは、師の弟子に対する教導はこのヴィジョンの意味の解釈を中心に行なわれた。このヴィジョンとその解釈を中心とするクブラウィーヤの教義は理解しやすいものとは言えず、その意味で、その教義は大衆よりもエリ

ート層が受け入れやすい教義であったと言える。

また、このヴィジョンの解釈は、師と弟子の間の書簡のやりとりによっても可能であった。つまり、クブラウィーヤでは遠く離れた師と弟子の間で、一種の通信教育が可能であった。他の諸教団で、多くの場合、師と弟子の道場での同座が教導の必須条件とされていた事を考えると、これはクブラウィーヤの大きな特徴と言える。

以上二つの論点は、クブラウィーヤと呼ばれるスーフィー達が、他の教団のスーフィー達とどのような点で異なるのかを明確に示しており、今後のイスラーム神秘主義教団の比較研究に資するところは大きい。

5) モンゴルのイスラーム改宗に当たって、当事者として活躍したとされるサイフッディーン・バーハルズィー、およびサドルッディーン・ハンムーヤらの事蹟を仔細に検討して、モンゴルのイスラーム受容に関する通説、すなわちクブラウィーヤのスーフィーたちがモンゴルのイスラーム受容に大きな役割を果たしたとする通説を、根拠のないものとして退けている。

この部分は、ほとんど自明とされてきた通説を一次史料の記述を根拠に明快に否定したものであり、論者の研究の独創性をよく示すものと言える。

以上の他に、なお触れるべき本論文の優れた諸点を挙げれば次のごとくである。

1) 論者は、イスラーム研究者によってしばしば問題にされる、アフル・アルバイト（預言者ムハンマドの一族）崇拝とシーア派信仰との関係について、クブラウィーヤの一員であるアラウッダウラ・スィムナーニーのペルシア語、アラビア語の混じった書簡を通じて考察している。この書簡はこれまで学界でほとんど利用されることのなかった史料であり、論者が難解なその全文を訳出して学界に紹介した意義は大きい。その意味で、論者は史料面でもイスラーム研究を一步前進させたと言える。

2) 本論文の冒頭で、これまでのタリーカ（イスラーム神秘主義教団）研究を総括し、今後タリーカを研究する上で注意すべき問題点が何であるかを明快に提示している。

この部分は論者のタリーカ研究史についての該博な知識と、諸研究を批判的に総括しうる論者の頭脳の明晰さを示すものと言える。

3) 本論文の末尾にクブラウィーヤの始祖ナジュムッディーン・クブラーの著作目録を付す。これは、諸写本の所在地、写本番号などをも網羅した最新の目録であり、その利用価値は多大である。

このように本論文は、クブラウィーヤ関係の一次史料に密着した独創的な研究であり、従来のクブラウィーヤ研究を大きく前進させた卓越した研究としてきわめて高く評価できる。

ただ本論文にも、なお望ましい点が全くないわけではない。クブラウィーヤの修行法としてもっとも重要なハルワ（独居）と「八つの規定」との密接な関係については、少ない根拠から結論を急ぎすぎたように思われる。さらなる論拠の補強が望ましい。しかし、本論文の優れた内容を考えれば、これは強いて瑕瑾を指摘したに過ぎず、その価値を少しも損なうものではない。

以上、審査したところにより本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。